補論１　マルクス主義経済学における価値論の意義

「マルクス経済学講座」（上）p.46

価値論の課題は何か。『資本論』はなぜ「商品」からはじまっているのか。

商品とか価値が問題になっているのではなく、資本と賃労働との関係、あるいは資本家と労働者との関係を明らかにするためには、それらの前提をなし、基礎をなしている諸概念をあらかじめ明らかにしておくことが必要である。マルクスは、「賃労働、資本等は価値。貨幣、価格等を前提とする。他の概念の前提となり、基礎となっている「単純なもの」から出発し、現実的のものを多くの規定と関連を持つ総体として具体的に明らかにすることが、経済学の正しい方法である」（「経済学の方法」の「序説」）

すなわち、価値論とは、資本主義に固有な搾取関係を明らかにするための第一の基礎作業である。

価値は、おそらく重要なのも、尊いもの、真・善・美などを意味している。商品にも、なんらかの質的に共通な重要性、尊さがあり、それを価値とするわけだが、古典派経済学においては、価値論は、もっぱら商品の交換比率を決定する問題としてのみとらえられていた。そして、現代の経済学の価値を神秘的・形而上学的な概念として経済学から追放している。

それでは、価値論は商品をとおして現れる人間関係を明らかにするものである。

奴隷制や封建制は人間の人間に対する直接的。人格的支配関係が存在していた。資本主義社会は他人と人間関係を取り結ぶためには「金に物を言わせて」となる。商品生産のもとでは、人間と人間の経済関係は直接、透明なかたちでは現れてこない。商品と商品の関係をとおしてのみ現れてくる。

商品の価値というのは、人間関係を映し出しているカゲ、あるいは暗号のようなものである。貴重な秘密のカギを握っている暗号も、それを読みとることができなければ単なる真皮にすぎない。

労働価値説は正しいか

1クオーターの小麦＝aツェントナーの鉄

・マルクスは等式を成り立たせている共通物は、物理的・化学的属性ではないといい、価値の実体を抽象的人間労働に求めている。

では、土地と切手は成り立つか。マリクスは、注意深く労働生産物だけをとりあげている。非生産可能な商品は同列には論じられない。

・共通性として、たとえば有用性一般はどうか。結局は定義の問題である。マルクスが使用価値的な諸属性を抽象したのは、恣意的な主観ではなく、使用価値がまったくちがっている小麦と鉄が等置されている事実によっている。有用性は、他の物との差別性の上に成立している。

・価値の実体は人間労働である。なんびともひていできない。それはマルクス経済学が人間と人間の経済関係を明らかにする立場と重なっている。

価値の実体を労働だとすることにより、資本主義的人間関係、つまり、資本家による賃労働者の搾取関係を解明することができる。

価値法則の役割

価値法則とは、商品の価値量は、その商品の生産に社会的に必要な労働の量によって決まるという法則である。さしあたっては商品交換の基準となる。そして、価値法則は商品交換のみならず、人間関係をも規制することが重要である。

1個の生産物が必要とする労働の量と、その生産部門が必要とする労働の量とを前提として、生産物への欲望の量とが確定されてはじめて決まる。

所有関係の分化と社会的分業にもとづく商品生産の基礎上では、この社会的労働の配分を価値法則が果たす。

人間がつくりだしたものが、人間に対立し、人間を支配・規制する。商品生産のもとでは、社会的労働の配分が、人間によって意識的、軽悪的に行われるのではなく、」逆立ちして行われることに注意しなければならない。